

Ep. 13

博物館業界の
さまざまな格差

それは館の責任ではない

日進月歩の技術革新で、どんどん便利になる私たちの生活環境。財源不足が深刻な博物館でも、新しい技術によってさまざまな可能性が生まれています。しかし、地方出張で全国を飛び回っていると、気の早い心配をしまったりして…。

電気自動車が実用化間近ということで、時々ニュースで取り上げられています。車自体はかなり市販レベルに近づいているそうですが、車体そのものの開発以上に課題になると言われているのが、インフラとしての「充電スタンド」の整備。電気自動車が普及しなければ充電スタンドを作っても無駄になる、さりとて充電スタンドの環境を整えなければ電気自動車の普及自体が難しい…というわけです。

まさに「鶏と卵」の関係ですが、他人事とは思えません。出張で地方の館を訪問したり、博物館の学会やシンポジウムに出るたびに、「電気自動車現象」と思い出してしまうのです…。

博物館業界に蔓延(?)する「格差社会」現象

たとえば、博物館資料のデジタル化や高精細画像のアーカイブ化、インターネットの活用といったテーマの学会では、技術開発に関わる議論が交わされます。もちろん、活発な意見交換は喜ばしい限りなのですが、その技術は本当に広く活用されるものになるのでしょうか。

先日、とある博物館関係者の方に、「一人学芸員」の館をどう支援したらいいかと意見を求められました。学芸員の研修イベントや勉強会は確かに増えたものの、出席できるのは実は限られた人だけ。結局、参加するのはおなじみのメンバーばかり…という現象に悩んでおられるとのことでした。

こうした機会に参加するには、持ち場を離れることができる人員的な余力が必要。なおかつ、研修会が多く開かれるエリアの館に勤務しているか、出張費が確保できるだけの予算も不可欠。これらを満たせなければ、意欲はあっても出席できない。そんなお悩みをお持ちの関係者は意外なほど多い…。

確かに、私が知る限りでも、「余裕がない」館は少なくありま

せん。一方、そのチカラに恵まれた館の学芸員は、着々と研鑽を重ねている。ということは…実は、館の運営基盤の違いで、「格差」が広がっているということになるのです。

小さくても素晴らしい館はたくさんあるのに

この「情報格差」の問題は、目立たないようで深刻です。研修制度が進めば進むほど、業界外部から見ると参加できない館が「劣っている」ように見えてしまうからです。その館が素晴らしい品を所蔵していても、地域へのフィードバックするチカラが足りないように思われてしまうからです。

業界を取り巻く環境は苦しいものがありますが、それでも、積極的に新しいことにチャレンジして世間の注目を集める館が増えてきました。来館者数を伸ばす館、学校との連携や観光事業への貢献などで成果を収める館が増えること自体は喜ばしい限りですが、そうした傾向が周知されるほど、設置者が「ウチの館は何をやっているんだ」と怒り出すかもしれません。また、保存や修復といった基本的な業務ノウハウを維持できないような運営環境に喘ぐ館なら、その方面で深刻なトラブルを抱えてしまう可能性さえあるのです。

日々全国の博物館を回っている私であれば、問題の多くは「そうならざるを得ない環境」に原因があることが理解できます。しかし、設置者や一般市民は、それを理解できるでしょうか。技術が進むほど、現場が責めを負う機会が増えるのではないかと…と、気の早い心配で、私はクヨクヨとしてしまうのです。



地方の小さな館の駐車場にレンタカーを停めるたびに、「充電スタンドを設置してもらえるのだろうか」と立ち尽くします。ここに設置してもらうには、何をすればよいのだろうか…と。